

北上するサツマイモに思う

一般財団法人いも類振興会 副理事長

いづみさわ
泉澤

ただし
直

昭和の末から平成初期にかけて、私は茨城県農業試験場でサツマイモを担当していた。言わずもがな、茨城県はサツマイモの大産地である。普及可能な新しい品種を選ぶための試験や、現場で発生する様々な障害の原因解明に、充実した日々を送っていた。

そんなある日、近県から人が訪ねてきた。そして「退職後は北海道でサツマイモを栽培し、干しいもの加工をしたい」と告げた。あまりにも突然のことで言葉がなかったが、真剣な、そして情熱的な語り口は、単なる思いつきではないようであった。私は困惑しながらも、栽培や加工について説明した。「気温の低い北海道で、中味の充実した、おいしいサツマイモができるかどうか分かりません」と何度も強調したことを覚えている。その方はその後何回か訪ねてきて、疑問点を投げかけ、また夢を語っていった。次の年の秋、北海道から驚くほどおいしいジャガイモが届いた。しかしその後は音信が途絶え、私も気になりながら連絡することをためらった。

あれから30年近くたつ。今ではまとまったサツマイモの栽培が、北海道で行われていると言う。農林水産省の統計には、北海道の平成29年の栽培面積は23ヘクタールで生産量は412トン、そのうち干しいもと

して109トン使われているとある。なんと、小さいながら干しいもの産地ができつつあるのである。30年前、あまりにも突飛に思えたことが、今実現しているのだ。この事実は、当然地球温暖化の影響によるのであろう（北海道のサツマイモについては、すでに本誌でも記事として取り上げられている）。そして、このサツマイモを北上させた流れは、全国のサツマイモ産地に何らかの影響をもたらすかもしれない。

現在、茨城県の干しいものは空前の人気を博している。それは「べにはるか」など新しい品種の登場も大きいだろうし、また産地の不断の努力が実を結んだともいえる。考えてみれば、茨城県の干しいも産地の栽培法と加工法は30年で大きく変わった。私の目には、現在の畑も加工場も以前に比べて違った景色に見える。その変化は様々な原因が考えられるが、温暖化も要因の一つと言えるであろう。干しいも産地も、状況に合わせて様々な変化を遂げているのである。

約30年前、ひょっこり訪ねてきて私を驚かした人を思い出す。あれから時が経ち、サツマイモ栽培は大きくかわりつつあることに改めて気づく。そして令和という新しい時代を迎え、また予想もしないことが起こるのかもしれない。